

現代文カリキュラム方針

●アカデミアクラス現代文の主題を考える上での前提

アカデミアクラスの学びの3本柱を現代文という教科を通じた解釈をすると次のようになる。

a. 批判的思考力

1. 知的な世界の生活者になるための言語能力を身に付ける。
2. 価値がある／価値がない、と感じ取れる教養と「審美眼」を身に付ける。
3. 自分が「分かる」のか「分からない」のか、「分かることができるのか」を正しく判断する力を身に付ける。
4. 文学作品の読解を通して、ある時代や社会の人間、文学的テーマが、表現者の眼を通して「文学」という形式で、どのように濃縮／分析／隠蔽して表現されているかを読み取る。

b. 創造的思考力

1. あらゆる分野から知的な楽しみを探れる、「真の何でも屋」になる。
2. 学んだ知識や技術を反映させ、良い解釈や良い疑問を産むためのアプローチが出来る。
3. 「見えなかった所に手を届かせる」ことが可能になるような、読みや表現をより高度で魅力的にするための手順や方法を身に付ける。

c. 実践的思考力

1. 自分の考えや解釈を、文章などの形で表現できる。
2. 各教科・あらゆる分野に橋を架ける／橋を架けてもらう体験ができる。
3. 読書、新聞、芸術鑑賞など、方法を問わず「表現されたもの」を自ら求め、発信・討議・共有する空間の創造に、各人が寄与することができる。

※相互補完的な関係であるが、「 $a \rightarrow b \rightarrow c \rightarrow a \rightarrow \dots$ 」という経路を辿るたびに、高次のものへと高められていくことになる。

●アカデミアクラス現代文の主題

難しく楽しいものこそ、真に学ぶ価値がある、という価値観を共有し、現代に蔓延るポピュリズムの波に立ち向かう、真のエリートを養成する。そのために、「大人の文章」の読み書きを身に付け、あらゆる分野を幅広く知り、その教養によって、さらにハイレベルで魅力的な読解や演習を行う能力を身に付け、「真に知的な何でも屋」を育てる。そして、それを共有し、批判して高め合う空間を創造していく。

●カリキュラム方針

a. 批判的思考力

1. そもそも、「読めない」のではなく「読んでいない」生徒が多いということを念頭に置き、「集中して読ませる」「考えながら読む」「分からない・知らない所に気づかせる」訓練を行う。もちろん、読む価値のあるテキストを用意する。
2. 「知的な世界の生活者」となるために、文章の添削や、お手本となる文章を読むことを行い、知的な文章を書く訓練をする。「～じゃない」「めっちゃ～」といった「幼稚」な表現や、「感動した」「共感した」が連発されるような発想自体が「低俗」なもの・思考停止したものは認めず、知的で高尚な表現力の獲得を目指す。
3. 自分が良き批判者となり、自分の表現が良い批判者に読まれる、ということを実感した上で文章の読み書きができるようになるための練習を行う。
4. 「分からない」と思っていた文章や概念が「分かる」、または「分かる」と思っていたものが「分か

らない」という体験を繰り返し、自分が獲得した知識を昇華させていく。

b. 創造的思考力

1. 読みがより魅力的になるような、良い疑問や良い着眼点を育てる練習を行い、優れたものを共有する作業を繰り返す。
2. 現代文はあらゆる分野を哲学的に扱う分野であるので、読んだ文章やあらゆる分野を愉しむための道具（＝教養）とする知識と好奇心を養う。
3. 読みや表現に万能の公式はないが、あるていど汎用性のある方法は存在する。「心強い参考資料」となるべき手順や方法を体験させる。
4. 国語の授業で概説程度に扱われたとしても、他教科では深いレベルの学びを行っていることがしばしばあり、その逆もよく見受けられる。鳥の視点と虫の視点の両方を知り、「すべての学問はつながっている」ことを、身をもって理解させる。

c. 実践的思考力

1. 頭の中で考えたことが、必ずしも文章やスピーチなどで表現できるとは限らない。メモ程度のものからきちんとした小論文まで形は様々だが、考えを表現し、共有・批判し合う体験を繰り返す。
2. b-4のような体験を繰り返すことにより、「自分の知識を参考にしながら理解する・理解を深める」習慣を身に付け、教科書・問題演習・特別活動・進路選択などあらゆる場面で、自分の知識を教養（道具）として使えるようになる。
3. 各種コンクールや個人課題研究などの機会に、調査をしながら徹底的に論じ切ったものを発表できるようにする。また、そこにたどり着くまでの苦渋と挫折の経験を知る。